

であるが、この小学校は学区制をしており、或部落の児童全員無条件に入学するので普通の小学校と同様である。付属幼稚園から進学する以外は殆んど大部分家庭から直接入学する。

保育環境が歯（乳歯）の石灰化に及ぼす影響について

保育医学研究会

深田 英朗

緒 言

戦後一〇年乳幼児の体位も漸次向上し、乳児死亡率も著しく低下した事は周知の事実である。

然るに乳幼児の歯牙疾患とくに齲蝕症はひとり年々増加の傾向をたどりつつある事は誠に我々小児歯科学を専攻する者にとってゆう一つの種である。

さて、ムシバ予防法は従来より幾多の研究業績もあり、例えば、鉍銀法、弗化ソーダー法等々色々あるが、いづれも今日その効果は未だ充分に期待出来ない。いわゆる建設医学的立場にたつ保育医学の観点からも本質的なものと思えない。

私共は強い歯質の建設こそ、ムシバ予防の第一段階と信じ、歯質の形成に保育環境が以外なる影響を及ぼすか、本研究に於て調査し

表 3 授乳法と歯の石灰化

| 授乳法 \ 灰化段階 | A | B | C |
|------------|-----------|-------------|-------------|
| 母 乳 | 9 8.6% | 58 55.2% | 38 36.2% |
| 人 工 | 1 6% | 8 47.0% | 8 47.0% |
| 混 合 | 1 2.4% | 28 66.6% | 13 31.0% |

表 1 妊娠中の状態と石灰化

| 母胎状態 \ 灰化段階 | A | B | C |
|-------------|------------|-------------|-------------|
| 健 | 11 7.6% | 83 57.2% | 51 35.1% |
| 否 | 0 | 9 47.4% | 10 52.6% |

表 2 生下時体重と歯の石灰化

| 生下時体重 \ 灰化段階 | A | B | C |
|--------------|-----------|-------------|-------------|
| 3000g 以上 | 9 9.6% | 56 59.6% | 29 30.8% |
| 2500g~3000g | 1 2.0% | 30 58.3% | 20 39.2% |
| 2500g 以下 | 1 5.3% | 7 36.8% | 11 57.9% |

表 4 乳児期の健否と歯の石灰化

| 乳児期状態 \ 灰化段階 | A | B | C |
|--------------|------------|-------------|-------------|
| 健 | 10 8.1% | 76 61.2% | 38 30.7% |
| 否 | 1 2.5% | 16 40.0% | 23 57.5% |

表、 保育環境と石灰化

| 灰化段階 保育環境 | A | B | C |
|--------------|------------|-------------|-------------|
| 上 | 6 12.8% | 25 53.2% | 16 34.0% |
| 中 | 3 4.8% | 44 69.8% | 16 25.4% |
| 下 | 2 3.7% | 23 42.6% | 29 53.7% |

た。

乳歯の形成は主として母胎内及び乳児期にその形成は完了し永久歯の形成は乳児期及び幼児期を通じて行われ、六才までにその歯冠部は全部完成されるのである。それ故歯牙の形成と乳幼児保育と云う事は、密接な不可分の関係があるのである。従来生活環境が、歯牙の石灰化に及ぼす影響については古くは、

Magriot Zigmoudy 新しくは

Melanly. SchourStein. Kronferd. Rushton. 生田等により広く研究されている。併しこれ等の研究は、殆んど実験動物によるものであり、尚幾多の研究余地を残すのである。

研究方法

私は、乳歯の歯質形成と保育環境との間に如何なる関係があるかを追及すべく一六四名の児童より蒐集せる脱落乳歯二七三歯につき病理組織的検査を行いそれらの構造と既成の保育環境とを比較してみた。尚調査の対照に選んだ児童はすべて東京で生れ、水道水のみを飲料としたいわゆる斑状歯発現のおそれの全くないもののみである。歯牙の病理的研究方法等については、問題が余りに専門的になるので省略するが、石灰化程度により調査歯牙をA、B、Cの三段階に判定した。尚調査項目は、

表一 (1) 妊娠中の母胎の健否と児童の歯牙の石灰化の状態

表二 (2) 生下時体重と石灰化状態

表三 (3) 授乳法が歯牙石灰化に及ぼす影響

表四 (4) 乳児期の健否と歯の石灰化

表五 (5) 母胎内より乳児期を終るまでの期間を通しての保育環境を

上、中、下の三段階に分類し、歯の石灰化の程度との関係を追及した。この場合環境上は生下時体重三〇〇g以上で母胎内乳幼児期を通じて何ら異状なくしかも母乳で哺育されたものは母胎内乳児期を通じての環境に於てどこかに相当の異状を認めたもの、又は生下時体重二五〇g以下のものは、上、下、下いずれにもあてはまらぬものと一応規定した。

研究成績

実験成績は表一〜表五に示す如くである。しかし、この研究では症例数が少なかつたこと及び既成の調査が質問法によつたため、解答者の主観によつて多少の開きなども恐らく出たため、未だ充分な成績ではないと思う。又歯牙の石灰化を左右するものが必ず保育環境のみでなく、これに加えるに遺伝と云う事があるため思った程の相関が得られなかつたのであろう。しかし本成績からして保育環境が有利であると云う事は歯牙の石灰化にもよい影響を及ぼしていると云う事は明らかだと信じる。